
NATIONAL
DIET
LIBRARY
MONTHLY
BULLETIN
2020.2

国立国会図書館
月報



第 85 回 IFLA 年次大会

あの人の蔵書 瀬越困碁文庫

国立国会図書館で働いています

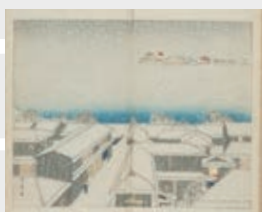
706 号 2020 年 2 月

国立
国会
図書館
月報

NO. 706
FEBRUARY 2020

CONTENTS

- 1 *The American diary of a Japanese girl*
海を渡って描いたものは？
今月の一冊 国立国会図書館の蔵書から
- 6 第85回IFLA年次大会
- 12 あの人蔵書 第2回
瀬越困碁文庫
- 16 国立国会図書館で働いています n.o. 2
- 20 欧州の国立図書館と複写サービス
- 24 館内スコープ
100年後もよんでほしい
- 25 本屋にない本
『君は河童を見たか！』
- 26 NDL TOPICS



表紙：
『東京大観』扉見返し
遅塚麗水 著 小村雪岱 画
有文堂書店 大正5 17cm
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/948263/138> (モノクロ画像)

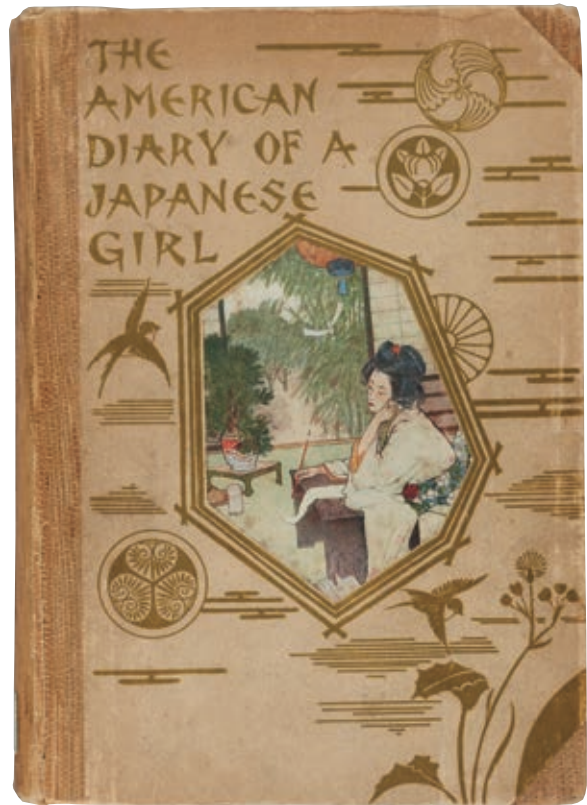
The American diary of a Japanese girl

海を渡って描いたものは？

曾木 颯太郎



出発前、洋装した「朝顔」。



The American diary of a Japanese girl

By Miss Morning Glory. Illustrated in colour and in black-and-white by Genjiro Yeto, F.A. Stokes Co. [1902] 5 p., [3]-261 p. col. front., plates <請求記号 F-30>

まだ見ぬ地への旅を前にして、人は何を思うでしょうか。次の一節を書き綴った少女は旅行を目前に控えて、どうやら希望と興奮に目を輝かせていたようです。

“My new page of life is dawning.

A trip beyond the seas – Meriken

Kenbutsu- it's not an ordinary event.

It is verily the first event in our family history that I could trace back for six centuries.”

（私の一生の新しい頁が明けつゝ、あるのです。海を越えての旅行—米利堅見物、其は尋常の出来事で無いのです、六世紀も遡ることの出来る私の家の歴史上真に初めての出来事なのです。）

これは今回ご紹介する小説 *The American diary of a Japanese girl* の冒頭の一節です。本作は明治35（1902）年に Miss Morning Glory（「朝顔嬢」）の執筆した作品としてアメリカで出版されましたが、実際には滞米中の野口米次郎（1875・1947）が名前を隠して英語で執筆した小説でした。当館では2冊所蔵しており、今回写真を掲載したものは昭和56



野口米次郎 (1875 - 1947)

詩人。愛知県生まれ。慶應義塾中退後、1893～1904年までアメリカ・イギリスに滞在。現地で詩集*Seen and Unseen*や*From the Eastern Sea*を発表して注目を集める。帰国後は慶應義塾大学教授として英文学を講じる一方、『二重国籍者の詩』など日英両語で詩作を続けた。また芸術評論の分野でも幅広く活動している。彫刻家のイサム・ノグチは本作の執筆に協力したレオニー・ギルモアとの間の子にあたる。

肖像の出典：『帰朝の記』野口米次郎 著 春陽堂 明37.12
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/889001/2> (モノクロ画像)



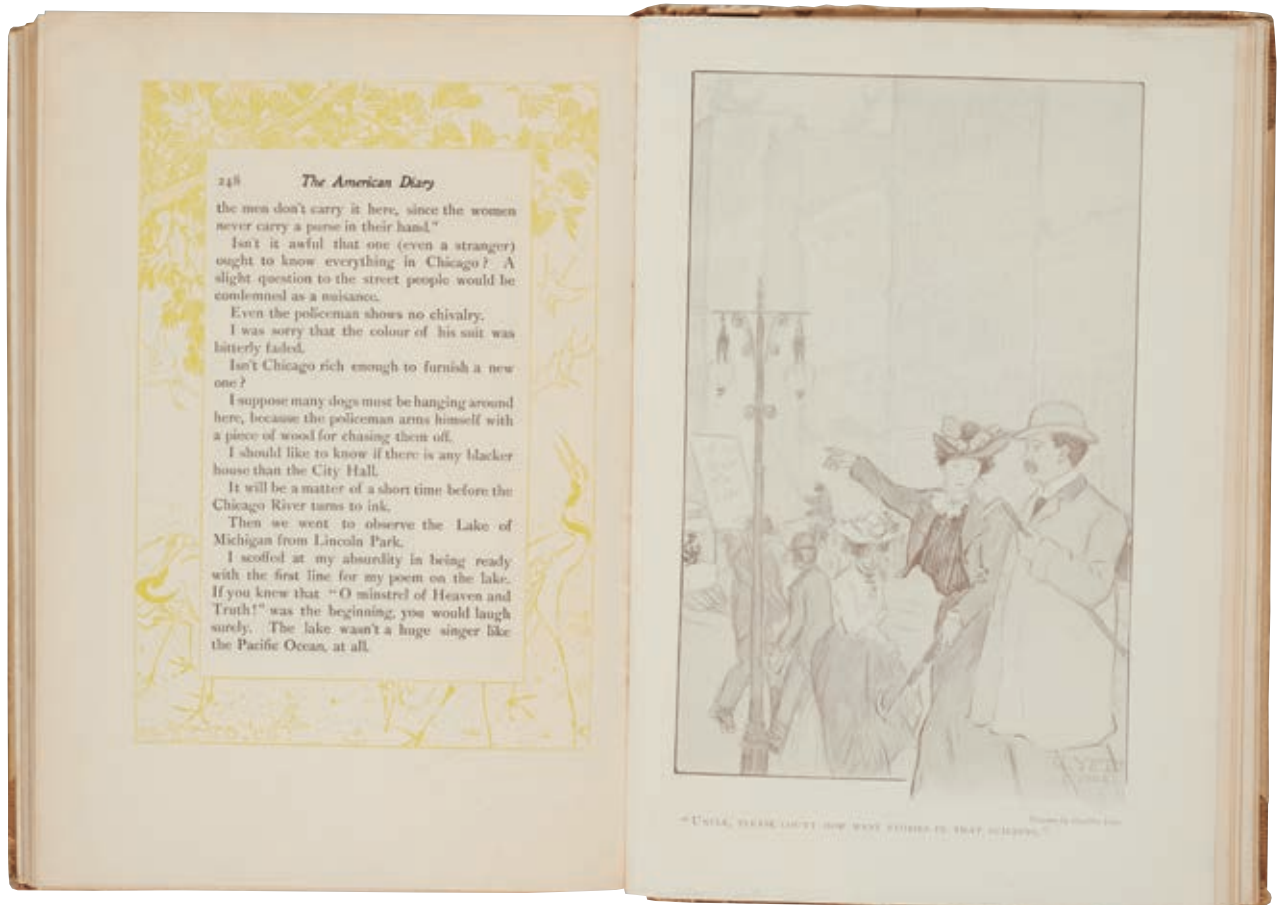
(上から時計周りに)

- ①中扉のカラーの挿絵。「朝顔」が着物で晩餐に出席する場面。
- ②「朝顔」の着物姿を見て着てみたいとせがむアメリカ人の友人Ada。
- ③友人のAdaと日本料理を食べる場面。箸の使い方に慣れず、生魚を恐れるAdaを面白がる「朝顔」です。

(1981年に日系アメリカ人のヨシオ・キシ氏(1932・2012)から購入したアジア系アメリカ人関係資料(キシ・コレクション)^①の1冊です。

野口は国内外で広く活躍した詩人であり多くの著作を残していますが、青年期には10年以上米英に滞在し、Yone Noguchi(「ヨネ・ノグチ」)の名で創作に励んでいました。日本から単身アメリカ・サンフランシスコに向かったのは明治26(1893)年のことです。現地では生活のため使用人や邦字紙の手伝いを務めつつ詩作を続けていました。明治30(1897)年に発表された詩集*Seen and Unseen* (『明界と幽界^②』)で注目を集めた野口は、明治34(1901)年に月刊誌*Frank Leslie's Popular Monthly*に本作の一部を連載し、翌年その全編を刊行しました。もともと、非母語での執筆は生易しいものではなく、残された書簡などから2人のアメリカ人女性が協力していたと考えられています。

本作では英米文学を愛好する活発な18歳の日本人少女「朝顔」を主人公に、日記形式で「朝顔」が鉱業会社勤務の叔父に連れられて渡米し、サンフランシスコ、シカゴを経てニューヨークに行き着くまでの日々が描かれています。日記を少しのぞいてみ



「叔父様あの建物は幾階あるか数へて頂戴な」シカゴでは建物の大きさにびっくり。1893年に万博を開催したシカゴには既に多くの高層ビルが林立していました。
なお本文には鶴や松などがあしらわれています。

ましよう。内容の多くはサンフランシスコでの体験で占められており、繰り返しアメリカの上流階級の家庭に招かれ、親しく付き合う様子が書き込まれています。そしてそこで出会ったアメリカ人少女と友人になり、容姿を見比べて一喜一憂しつつも、2人で遊びに出かけたことを楽しげに記しています。また、ボーイフレンドができると、結婚を申し込まれたらどうしようとはしゃいだり、少しツンとした手紙を送ってみたいと、描写の端々からアメリカ生活を満喫しているさまが浮かび上がります。

渡航前に「朝顔」が興奮していた20世紀初頭のアメリカは実際どのようなところだったのでしょうか。確かにアメリカのスケールの大きさに驚いてみたり、電気がホテルの至るところに備わっていることに感心したりと、「朝顔」の記述の数々からはアメリカへの感嘆の念がうかがわれます。その一方で、「必要も無いのにものを買う」といったアメリカ人の文化やマナーには日本人の視点から手厳しい批判を浴びせており、贅美ばかりではなかったようです。

とりわけ当時流行していたジャポニスム小説の皮相さへの反発は強く、例えばシカゴへ向かう列車内では間違えて買ったという「Madame Butterfly」（オペラ「蝶々夫

本のあちこちに鳥や朝顔などの日本の動植物があしらわれています。



野口米次郎の肖像画。左下に片岡源次郎のものと思われるサインがある。

『人生五十年』野口米次郎 著 第一書房 大正15
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1019063/4>
(モノクロ画像)

人」の原作)を日本人の描き方の点から容赦なく切り捨て、最後には

“I stepped out to the platform, and threw out “Madame Butterfly.””

(私列車のプラットホームへ出てね『蝶々夫人』を投げ出しましたのよ)

と述べてせいせいしています。また、縁談を拒み、タバコ屋の店番を引き受ける、ニューヨークでは自ら求職するなど、型にはまらない、当時としては新しい女性像を映し出している点も興味深いところでしょう。

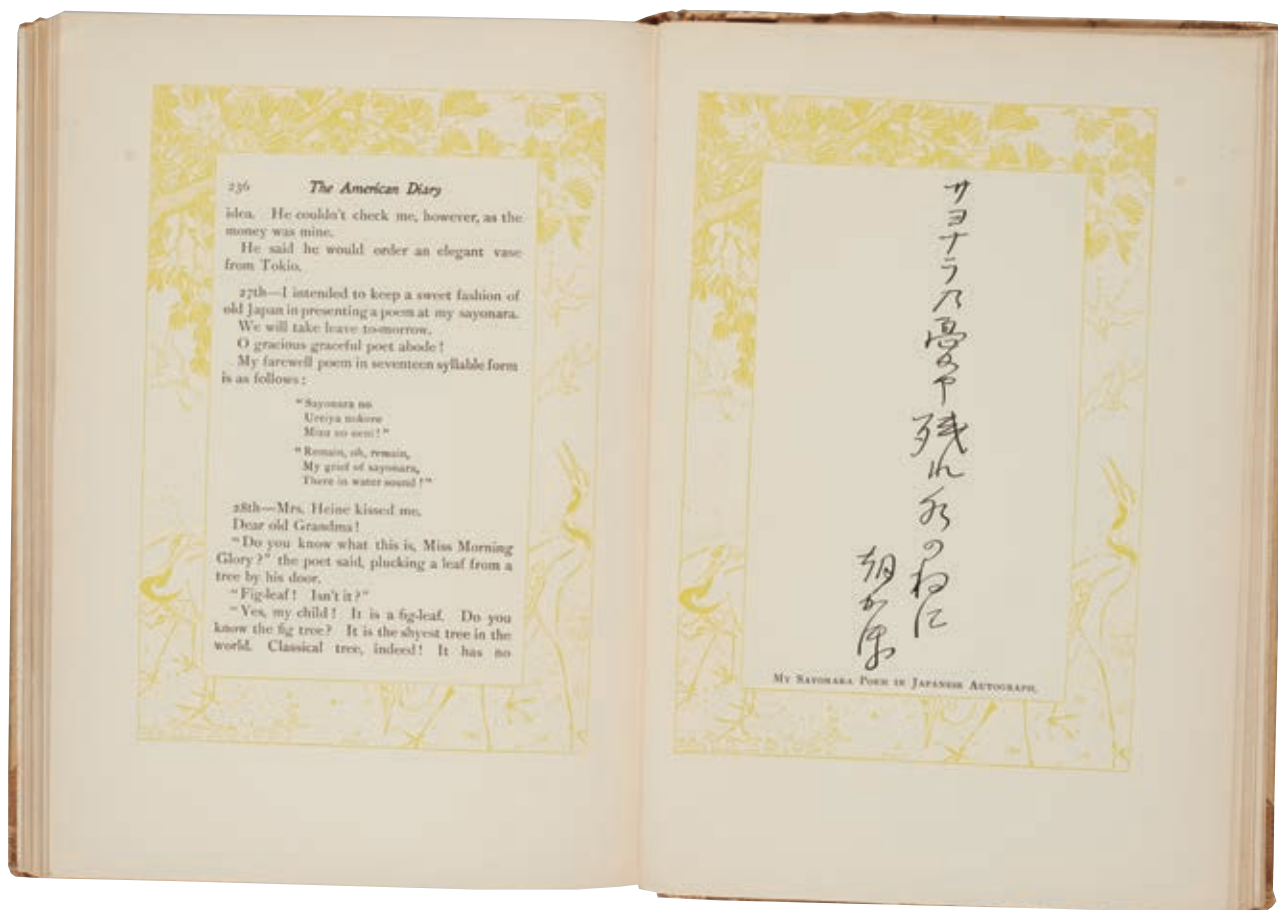
そんな「朝顔」を生き生きと描き出す表紙絵と挿絵は、画家の片岡源次郎(1867・1924)によるものです。野口同様渡米して、Genjiro Yano(「ゲンジロウ・エトウ」)の名で活動していた片岡はジャポニスム的な主題の挿絵を多く手掛けており、本書でも和洋それぞれの装いの「朝顔」を活写し、作品に彩りを添えています。

「朝顔」には野口自身と重なるものがあり、体験談や見解にも野口の経験が映し出されていることが指摘されています。その反面、野口の送った苦しいアメリカ生活と、本書に描かれた「朝顔」の恵まれた境遇は

似ても似つかぬものでした。期待しつつも最初は叶わなかったアメリカでの満ち足りた生活を、少女という自分とは異なる存在を通して、空想の世界で実現させようとしたのかもしれませんが。

必ずしも高い世評を得られたわけではない本作ですが、野口は後に続編『The American Letters of a Japanese parlor maid』⁽⁵⁾を執筆しています。また明治37(1904)年には日本でも原文のまま本作を出版し、明治38(1905)年には自ら『邦文日本少女の米国日記』⁽⁴⁾として翻訳しています。これらに対する批評も発表されており、本作の当館所蔵のもう1冊を旧帝國図書館が明治36(1903)年に購入していることもあわせて考えると、同時代の日本でも原文で読まれる機会がそれなりにあったといえます。異国を旅する少女に託した野口の体験や考え、そしてアメリカに抱いた夢は同じ時代を生きた日本の読者の眼にはいかに映ったことでしょうか。

*文中英文はThe American diary of a Japanese girlより、日本語訳は『邦文日本少女の米国日記』の対応箇所より引用しました。



「朝顔」はサンフランシスコ出発を前に惜別の句を詠みます。本文(左ページ)では“Remain, oh remain, My grief of sayonara, There in water sound!”と英訳されており、英語で書かれた最初期の俳句と考えられています。

- 1 <https://nnavi.ndl.go.jp/kensei/entry/ve1.php>
- 2 近年の邦訳としてヨネ・ノグチ『詩集 明界と幽界』彩流社, 2019.10 <請求記号 KS179-M408>があります。
- 3 <請求記号 C-125>
- 4 <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/889203> (モノクロ画像)

○参考文献

- 宇沢美子「朝顔の描き方 ヨネ・ノグチとエトウ・ゲンジロウのジャポニズム遊戯」『AALA Journal』(10), 2004 <請求記号 Z12-B53>
- 亀井俊介「ヨネ・ノグチの英文著作 別冊日本語解説」(*Collected English works of Yone Noguchi: poems, novels and literary essays v. 1*, Edition Synapse, 2007 <請求記号 KS165-B4>)
- 木内徹「野口米次郎 俳句を世界に広めた人」『俳句』65(10), 2016.9 <請求記号 Z13-189>
- 羽田美也子『ジャポニズム小説の世界 アメリカ編』彩流社, 2005.2 <請求記号 KS184-H44>
- 星野文子『ヨネ・ノグチ 夢を追いかけた国際詩人』彩流社, 2012.10 <請求記号 KG582-J122>
- 堀まどか『「二重国籍」詩人 野口米次郎』名古屋大学出版会, 2012.2 <請求記号 KG582-J101>
- 堀まどか「野口米次郎『日本少女の米國日記』の米米における評価」『日本女子大学大学院の会誌』第22号, 2003.3 <請求記号 Z24-448>
- 和田桂子「野口米次郎のロンドン(20)日本少女の米國日記」『大阪学院大学外国語論集』(54・55) 2007.3 <請求記号 Z12-372>
- The American diary of a Japanese girl / Yone Noguchi*; edited by Edward Marx and Laura E. Franey; with original illustrations by Genjiro Yeto Temple University Press, 2007 <請求記号 KH447-B7>



パーマに憧れ、自分でやってみるも四苦八苦。

Libraries: Dialogue for Change

第85回

IFLA年次大会

令和元年 8月24日(土)～30日(金)
アテネ (ギリシャ)



世界中の図書館が協力しあい、共通の問題を解決し、図書館の未来を切り開いていく存在、それが国際図書館連盟、通称「IFLA」です。

毎年開催されるIFLA年次大会では、世界中から多くの図書館員が集まり、図書館に関する多くの課題について最新の知見を情報交換し、議論を交わします。

今大会はギリシャの首都アテネで開催されました。テーマは「図書館：変化への対話」です。

130以上の国・地域から、約3300人が参加し、期間中は、分科会等による多数の公開セッションのほか、各国図書館団体や関連企業等が出展する展示会や、ポスターセッション等が行われました。年次大会に合わせ、国立図書館長会議（CDNL）⁽²⁾や、関連する行事も開催されます。

国立国会図書館（NDL）は、今大会も派遣団を組織し、分科会等に出席し、議論や発表などを行いました。

アテネ・アクロポリスにあるハドリアヌスの図書館



国立図書館長会議(CDNL)



(上) 世界の国立図書館の機能と活動を視覚化したものがランチポスターとして貼り出されました。
(右) 今年のCDNLのロゴ。



団長・羽入佐和子
(館長)



グループディスカッションでは「現在と将来においてなぜ国立図書館が重要か」というテーマで、小グループに分かれて討論を行い、グループごとに短い映像を作成しました。

IFLA 年次大会のテーマ 'Libraries: Dialogue for Change' に明らかなように、今年のキーワードは「対話」でした。それは開催地アテネを象徴する言葉でもあります。

CDNL では、各国の国立図書館長が個別に対話する機会が多く設けられ、それは形式的な「会議」ではなく、実質的な「議論の場」となりました。今年には特に、次世代に向けて国立図書館の役割をどう伝えるかを中心的に議論しました。

国立図書館はどこも、その存在の意義と将来の在り方を真剣に考えていることが実感できる会でした。

会場であるスタプロス・ニアルコス財団文化センターは複合施設で、ギリシャ国立図書館も含まれます。

(右) 図書館の外観。

(下) 図書館内部の吹き抜けの様子。



水戸部由美
(総務部企画課)

IFLA 年次大会開会式で、ギリシャ図書館員・情報専門家協会会長とギリシャ国立図書館長のお二人が、温かみのある「対話」形式で歓迎の辞を述べてくださいました。CDNL では数か国の図書館員と「対話」する機会があり、忘れがたい経験となりました。帰国後には、読んだことなかったプラトンの対話篇の翻訳書を少し読みました(自分にとっては一つの「変化」)。多くの図書館員の熱意に触れた、アテネの暑く、熱い夏でした。

議会図書館



IFLA 本会合に先立ち、ギリシャ議会の旧上院本会議場で議会図書館分科会プレコンファレンスが行われました。



議事堂内の建物の中にある議会図書館。廊下沿いに議会各会派の控室などが並んでいる一角に位置しています。

今回の会議参加は、情報環境が激変する中、議会のための図書館・サービス業務に真摯に取り組み、信頼できる情報を提供、発信していくことの重要性に改めて思いを致す機会となりました。

プレコンファレンスでは、分科会で刊行している『議会図書館ガイドライン』の改訂に向け、ワークショップで意見交換を実施しました。世界各国の議会図書館でそれぞれ参考にしてもらえよう、時代の変化も的確に織り込みつつ、新しいガイドラインをどのように取りまとめしていくかについて、熱心な議論がなされました。



奥山裕之
(調査及び立法考査局国会分館長)
議会のための図書館・調査サービス分科会常任委員

障害者サービス



印刷物を読むことに障害がある人々のための図書館分科会常任委員会会議の様子。

安藤一博
(関西館図書館協力課)
印刷物を読むことに障害がある人々のための図書館分科会常任委員



常任委員になって初めての参加でした。2019年は日本をはじめ、米国や欧州もマラケシュ条約に批准し、大会でも条約を意味あるものにするために何が出来るか活発な議論が行われました。印刷物を読むことに障害がある人々の図書館サービスを考えるという点では同じでも、政治的、文化的、経済的コンテキストの異なる国の図書館員と同じ土俵に立ち、会議の場で意見交換できたことはとても刺激的でした。



アテネ市内で食した日本ラーメン（焦がし醤油ラーメン）。

メイン会場である、メガロン・アテネ国際会議場。



資料保存

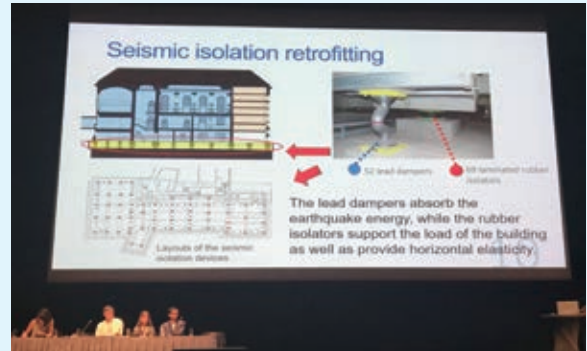


佐藤 従子

(収集書誌部司書監)

資料保存分科会常任委員
/ 資料保存戦略プログラム
(PAC) アジア地域セン
ター長

資料保存関係では、他にも、手軽に使える顕微鏡やカメラを使って資料のインクや顔料を調査する方法を紹介するセッション、大学図書館における研究データの保存提供の取組みと課題を報告するセッション、地域の文化等を記録した録音映像資料の保存提供に関するセッションなど、多彩なプログラムで興味深い報告を聞くことができました。



オープンセッションで当館の建物の耐震対策について発表。他の図書館からも洪水被害対策や防火など、具体的な対策についての紹介がありました。

IFLA総会

団長代理として投票しました。



文化の夕べ

ギリシャの民族舞踊が披露されました。



情報技術



青池 亨

(電子情報部電子情報企画課)

初めての参加と発表でしたが、世界各国の図書館が検索サービス等の事業に、機械学習技術(AI技術)をどのように生かそうと試みているのか把握することができ、大変勉強になりました。デジタル化資料(画像データ)を対象にしたサービスを報告した機関はNDL以外になく、またソースコードの公開をアナウンスしたことで会場の印象に残ったのではないかと思います。



会場の参加者が発表スライドと同じ内容を手元ですぐに試せるよう、QRコードを表示。

オープンセッションでの報告の様子。NDLが研究開発した、AI技術を活用した実験サービス「次世代デジタルライブラリー(<https://lab.ndl.go.jp/dl/>)」について報告しました。



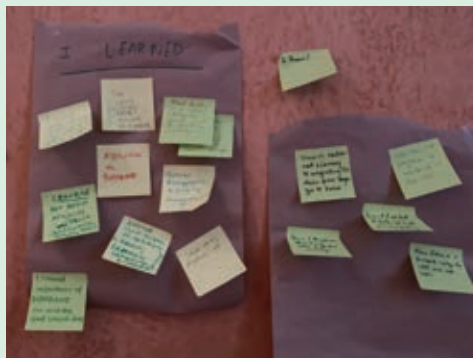
相原雅樹
(利用者サービス部科学技術・経済課)

「日本の学術情報における灰色文献」と題して、当館が学協会に対して実施したアンケート調査の分析をもとに学術雑誌・会議録の収集・保存・アクセス提供の取組について発表しました（調査結果は当館ホームページ「リサーチ・ナビ」で公開しています）。博士論文など従来の「灰色文献」の電子化が進みオープンになっても、科学は収集・保存しにくい新たな「灰色文献」を作り出すという参加者の発言が印象に残りました。

逐次刊行物



サテライトミーティングでのプレゼン風景が、ツイッターで流れました。



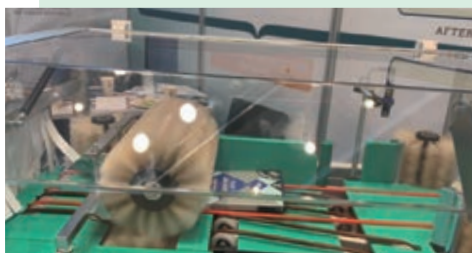
書誌分科会オープンセッション「書誌クリニック」にて、教えたこと、学んだことを皆で付箋に書いて貼りました。

書誌・目録



村上一恵
(収集書誌部収集・書誌調整課)
書誌分科会連絡委員

今大会中に書誌分科会連絡委員として承認されました。分科会会議では、活動報告や活動計画の検討などに加えて、分科会活動へのかかり方についての説明などもあり、新規委員でも参加しやすいよう工夫されていました。書誌分科会では、各国の全国書誌の概要を集めた「全国書誌登録簿 (National Bibliographic Register)」をホームページで公開しています (<https://www.ifla.org/node/2216>)。分科会会議で「全国書誌登録簿は IFLA だけがができる仕事」と紹介されたことが印象的でした。日本の全国書誌作成機関として、これからも IFLA の活動に貢献していきたいと思っています。



本を自動でクリーニングする機械の展示。まるで洗車機!



トマトスープ。暑いときにも食べやすい冷製で、クルトン状の黒パンとたっぷりのクリームチーズが添えられていました。



移動に使ったシャトルバス。

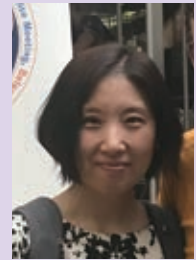
夜 8 時のアクロポリス。



児童・ヤングアダルト



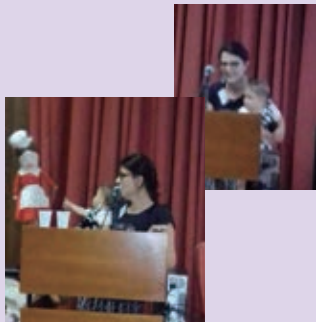
アテネ市子ども図書館の内部。こちらは乳幼児向けの図書館で、お隣に児童ヤングアダルト向けの図書館があります。



白井京
(国際子ども図書館企画協力課)

サテライト開催地がセルビアと知ったときは、20年前のユーゴ空爆を思い出し冷汗が。でも現在のベオグラードは平和で、バルカン地域の図書館員の皆さんの児童サービスへの熱意を感じました。そして、世界では「図書館の児童サービス」が紙の本の読書にとどまらず、情報スキルや科学技術リテラシー、多文化理解など「生きるために必要なリテラシーの習得」に拡大していると改めて実感。国際子ども図書館に何が出来るか、考えていかなければなりません。

セルビア国立図書館でのサテライトミーティングでは子どもを抱っこしたまま発表する方も！ちなみに末のお子さんで、上の二人はお国でお留守番だとか。



カンファレンスバッグの中に入れていたもの。チュッパチャップスも入っていました！



セルビアの首都、ベオグラードの街並み。主な交通手段はトラムとバス。



閉会式

次回はアイルランドのダブリンで開催。



IFLA 会長がペレス・サルメロンさん（右）からマッケンジーさん（左）に交代。会長職の象徴である小槌が手渡された後の様子。

あの人蔵書

瀬越因碁文庫

井上 奈智

瀬越憲作の履歴

瀬越憲作は、明治22（1889）年、広島県佐伯郡能美島高田村（現広島県江田島市）に生まれました。5歳で眼の病を患った時に、囲碁好きの祖父から手ほどきを受けたのが囲碁との出会いです。小学校を卒業してから、仕事の関係で父親がいた広島市に出ると、学校を休んで囲碁ばかり打ち、広島には敵なしの実力になりました。

瀬越がプロ棋士を志して東京に出た明治40年代、囲碁界は、坊門（本因坊）と方円社に分かれていました。坊門には、川端康成『名人』で知られる二十一世本因坊秀哉がいました。上京の世話を務めた広島県選出の政治家である望月圭介の勧めもあり、瀬越は方円社に所属して秀哉の打倒を目指すことになりました。瀬越は秀哉に手合割（当時のプロで用いられる実力差によるハンデイ）での対局で連勝するなど活躍しました。

瀬越は日本棋院の初代理事長を務めるなど囲碁界の運営にも尽力しました。さ

らに特筆すべき仕事は、アマチュアへの普及です。100冊以上の著作を著し、様々な棋会所で指導に当たりました。女性ファンの増加、観戦しやすいような短時間勝負の拡充、国別の対抗戦などを理想にしていました。現在は当たり前になりつつありますが、60年以上前から提唱してきた先見の明に驚かされます。

国内だけでなく、海外に足を運び国際的な活動もおこないました。中国大陸には大正8（1919）年に青島、旅順、北京を訪問し現地の棋士や愛好家と交流しています。その後も囲碁の祖国として何度も訪問しています。現地訪問はありませんが、ドイツ碁界の開拓者ともいわれるフェリックス・デュバル氏とも交流がありました。昭和25（1950）年にはハワイへ行き、ハワイ棋院を訪れるなど2か月間滞在しています。

日本囲碁界で活躍した呉清源の来日に尽力したほか、韓国出身の曹薫鉉といった稀代のスター棋士を育てたことでも知られています。呉清源は瀬越を温厚で

あるとされていますが、曹薫鉉が先輩に誘われて賭

け碁をしたときは破門を言い渡したほど、曲がったことに厳しい面もあったようです（曹薫鉉が瀬越の家を出たあと、先輩や他の棋士が何度も謝罪をして、結局破門はまぬかれました）。

また、過去の棋譜の収集と整理にも尽力し、『御城碁譜』や『明治碁譜』を刊行しました。

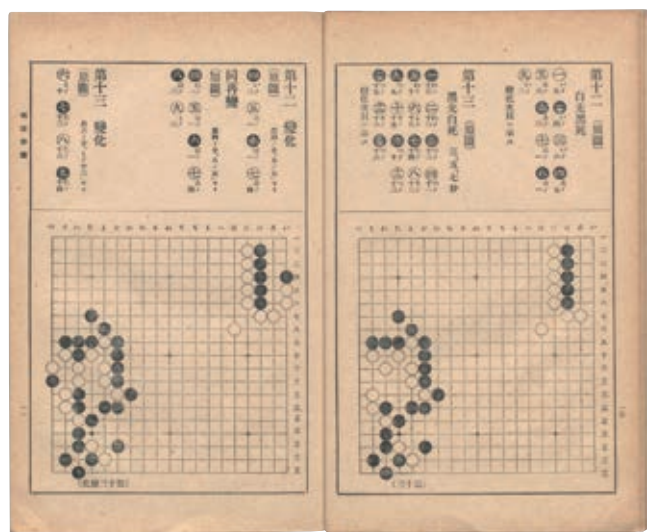
昭和47（1972）年、その生涯をとおしました。

瀬越因碁文庫の概要

昭和38（1963）年、本人から国立国会図書館に旧蔵書約320冊が寄贈されました。江戸時代を中心とする囲碁の解説書、明治時代の囲碁雑誌、囲碁普及のため瀬越氏が著した技術書などが含まれています。現在は、その大半がデジタル化されており、国立国会図書館の館内において、また一部の資料は図書館送信参加館において閲覧することができます。



■『死活妙機 新案詰碁』本因坊秀哉 著 大阪屋号 1939 4 版
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/3441191/9>



本図は石が多く手順は長いものの、基本的な考え方を一つの棋譜で学ぶことができます。

広島の中学期時代、すでに地力をつけていた瀬越は、周りに囲碁の強い人が少なかったため、古碁と詰碁に学びました。特に『時事新報』に掲載された秀哉の詰碁に夢中になり、解けない問題があると徹夜で考えたといえます。その連載の中に秀哉がまとめた『死活妙機』を、瀬越は名著であると高く評価しています。

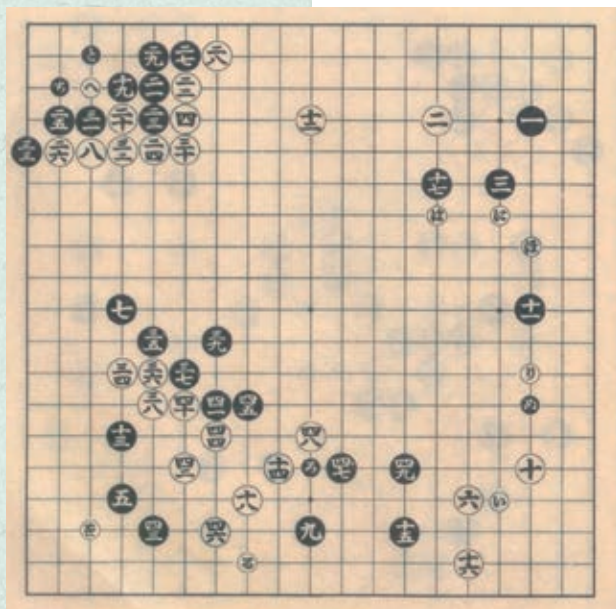
なお、「瀬越囲碁文庫」には、秀哉の著した『囲碁神髓』シリーズも含まれ、瀬越のものかどうかは分かりませんが、熱心な書き込みがあります。



■『新布石の針路』
 木谷実 著 日本棋院 1936
 <請求記号 795-Ki315s3 >

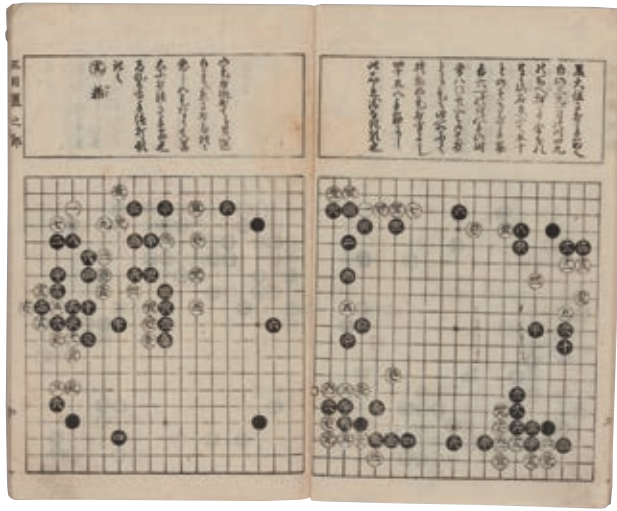
瀬越の弟子の呉清源は、当時名人だった秀哉を引退碁で破ったことでも知られる木谷実と「新布石」と呼ばれる戦い方を昭和8（1933）年に発表し、囲碁の戦術に革命を起こしました。瀬越は、昭和9（1934）年の木谷実との初手合いについて、終局に二手ばかり不注意の手を打ったので私が負けたが、碁としては、少しも押されるところがなかった、と回想しています。

木谷実の昇段記念に刊行された『新布石の針路』には、「従来の布石が地域に重点を置いたのに対して、新布石なるものは勢力に重点を置いてある（中略）極端にそれ（引用者注：従来の布石）を打破しやうとした試みである」という瀬越の評価が載っています。



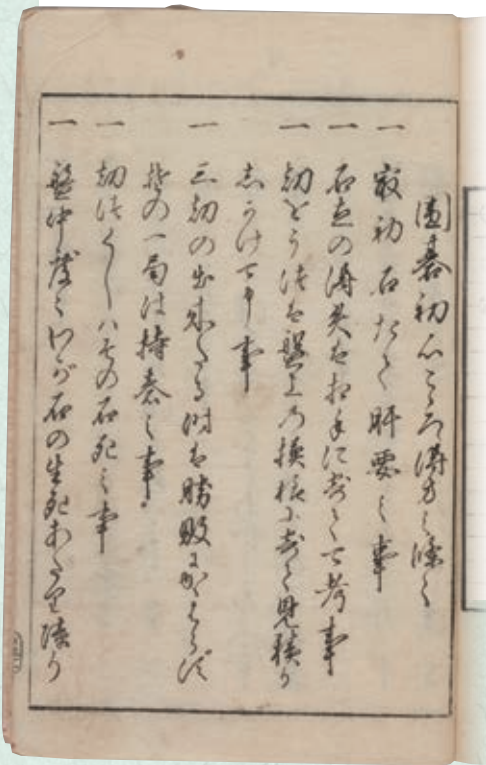
(上) 表紙。
 (下) 2人の2回目の公式戦が紹介されています（結果は木谷（白）の勝ち）。

- 『置碁自在 三目置之部』[服部因淑] [著] 刊 <請求記号 795-H338o II >
- 『囲碁捷徑 2巻』安井算知 著 須原屋伊八 嘉永 1(1848) <請求記号 795-Y611i >



「三目」は、現在では「三子」と呼びます。最初にハンディのために三つの石を「置く」ことで、黒を持つ下手（したて）が有利になります。この図は、下手がのびのび打ちやすいような指導基らしい局面です。

『置碁自在』は、江戸時代の置き碁（ハンディ戦）に関する指南書です。瀬越が活躍した大正期から昭和初期は置き碁によるプロ同士の勝負がありました。現在にはありません。一方で、昔から現在まで、指導碁では置き碁が盛んにおこなわれています。瀬越にも置き碁に関する多数の著作があります。瀬越自身も、アマチュアや弟子にも繰り返し置き碁で指導をしてきました。こうした資料を参考にしたいのかもしれませんが。



『囲碁捷徑』は、天保の碁界四傑の一人である安井算知による初心者向けの本です。「初心こころ得」20条が掲載されています。戦術方針だけでなく礼儀作法に言及しています。瀬越が著した入門書『新講囲碁入門』にも、囲碁は相当の作法が必要であり、例えば石で碁盤の横を叩いて鼻歌をやるのは言語道断などといった対局の作法や、上達の心得が書かれています。

下巻より。「最初石たて肝要之事」、「石立の得失は相手に寄て可考事」など初心者へ向けた心得が並んでいます。

■類縁コレクション

- 日本棋院囲碁殿堂資料館
<https://www.nihonkiin.or.jp/profile/sisetsu/dendou/>
 瀬越憲作の書物や理事長時代の職務資料などが残されています。
- 江田島能美図書館民俗資料室
<http://www.library.etajima.hiroshima.jp/folkmaterial>
 瀬越憲作に関する資料が保管されています。利用にあたっては、事前にお問合せください。
 (最終アクセス日：2019年12月13日)



■『御城碁譜 巻第 1-10』瀬越憲作 等編 御城碁譜整理配布委員会 1951 <請求記号 795-Se114o >

■『古今碁経拔萃 4 巻』玄玄斎主人 編 須原屋伊八 [ほか 3 名] 天明 6 (1786) <請求記号 795-G29k2-II >

『御城碁譜 巻第 1』より、
標題紙と目次。
御城碁以前と御城碁の棋譜がアーカイブされ、年表にも整理されています。



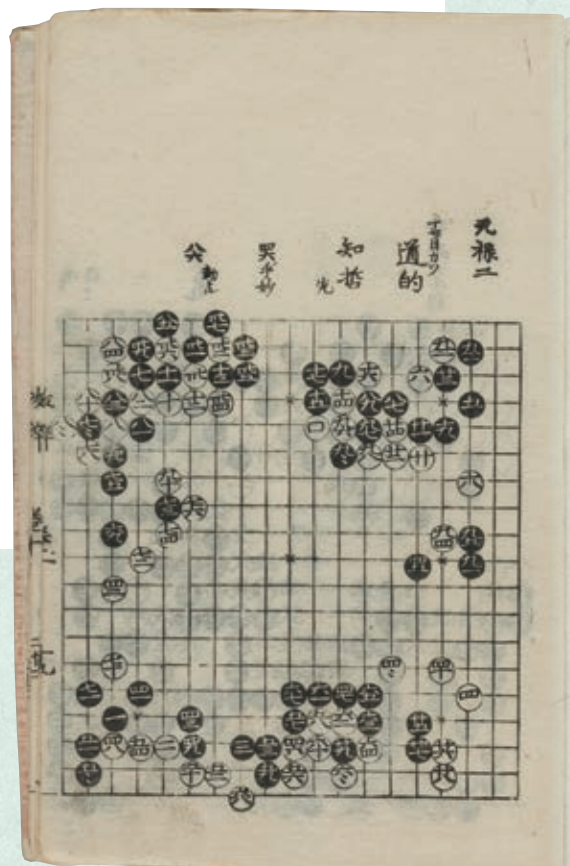
囲碁の技能は、江戸時代の 250 年の間に、それ以前の数百年間大きな変化がなかったにもかかわらず、「高効率の進歩」を遂げました。それを支えたのが碁所ごどころと御城碁おしろごでした。江戸幕府の役職である碁所は、囲碁界を代表する存在です。御城碁は、毎年、棋士が一門を代表して徳川将軍の前で碁の技能を競うもので、碁所就任を争う場にもなりました。棋士は日頃から研鑽を重ね、勝負の場では秘術を尽くしました。御城碁を通じて、日本における技能が飛躍的に進歩することとなります。

瀬越は、この御城碁の棋譜を整理し、全十巻『御城碁譜』にまとめました。瀬越囲碁文庫には『御城碁譜』の参考になったであろう資料が含まれています。

『古今碁経拔萃』は、天明 6 (1786) 年に刊行された、過去の著名な対局の棋譜をまとめた本です。ここには『御城碁譜』に収められている棋譜と同じものが確認できます。

図は 16 歳で本因坊家の跡目を認められるほどの実力者であった道的と、安井家 3 世の知哲との、元禄 2 (1689) 年の対局です。一手目 (白抜きで) 一と書かれている黒丸の地点が左下に書かれています。一方、瀬越の『御城碁譜 巻第 2』では、180 度回転させて、一手目が右上に書かれています。囲碁盤は、初期状態では一つも石が置かれていないため、着手の意味は全く同じです。現在では、黒の一手目は右上に着手されること がほとんどです。現在の読者に読みやすいように再構成したのかもしれない。

『古今碁経拔萃』春の巻より。



■参考文献

瀬越憲作 著『囲碁一路』産業経済新聞社 1956 <請求記号 795-Se114i5 >

ミニ電子展示「本の万華鏡」第 25 回「日本の囲碁—白と黒の戦い—」コラム「瀬越囲碁文庫」<https://www.ndl.go.jp/kaleido/entry/22/3.html>

『有段者名簿 昭和 34 年度』日本棋院普及部 1959 <請求記号 795.035-N685y >

曹薫鉉 著、戸田郁子 訳『世界最強の囲碁棋士、曹薫鉉の考え方 考えれば、必ず答えは見つかる』アルク 2016.8 <請求記号 KD949-L31 >

柴村羊五「囲碁閑談—瀬越憲作師の憶い出—」『ソーダと塩素』34(6)(401), 1983.6 <請求記号 Z17-216 >

瀬越憲作 著『新講囲碁入門』東光書房 1953 <請求記号 795-Se114s2 >

瀬越憲作 著『碁の形を教える金言集』棋苑図書 1970 <請求記号 Y78-1147 >

■ p.12 の肖像の出典 『囲碁一路』

国立国会図書館で働いています

no.2

「真理」とは何なのか、向き合うことが大事



——企画課ではどんなお仕事をしているのか？

企画課企画係は、当館の将来計画の策定に関することを所掌しています。当館は、それぞれの部局の中に企画部門があるので、個別のサービスに関する企画はそこで担当し、当係では全体的な計画や、複数部局を横断するような内容を検討していることとなります。今取り組んでいるのは、デジタル化をさらに推進するためのプロジェクトなのです。また、直近では、今後の様々な検討に生かすために図書館の利用に関するWebアンケートの実施と分析を行いました。

——次世代システム開発研究室（次世代室）の一員としてジャパンサーチを開発されましたね。苦労話などお聞かせください。

ジャパンサーチは、日本の様々な機関が保有する多種多様な資料のメタデータ（資料の所在や特徴を示す情報）を横断検索し、その発見可能性や再利用性を高めるといった目的を持っています。そのためには、様々な形式のメタデータを取り込める柔軟性と、幅広いユーザーに利用いただける間口の広さを持つと同時に、ヘビーユーザーとして想定される各種の専門家の要望を満たす必要もあります。そのため設計方針の検討に苦労しました。

——メタデータのフォーマットを「決めない」がコンセプトとか。

ジャパンサーチと連携するための最低限の条件は、IDとタイトルがあることです。あとは、連携元のメタデータの形式を原則そのまま受け付けるような仕組みにして、連携コス

トの低下を狙いました。

——ほかに次世代室で携わった実験サービスについて教えてください。

最近のものだと、次世代デジタルライブラリーを昨年3月に公開しました。これは、インターネット公開されているNDC6類の資料を対象に、精度は悪いですが全文検索と、挿絵等の図版の画像検索を行える実験サービスです。近いうちに、画像検索については対象資料を大幅に追加できる予定です。

——挿絵の画像検索は、国立国会図書館（NDL）としては新しい切り口のサービスですが、どういった経緯で開発されたんですか？

実は、挿絵検索はOCR（画像の中から文字を読み取る技術）精度向上実験の副産物なんです。挿絵は、場合によってOCRのノイズになるので、

川島隆徳 総務部 企画課 企画係長

H23 (2011) 年4月 入館 情報システム課システム第二係
H23 (2011) 年10月 電子情報サービス課業務基盤システム係
H26 (2014) 年4月 電子情報企画課情報統括係
H29 (2017) 年4月 企画課企画係
H31 (2019) 年4月 企画課企画係長
兼務や協力員として次世代システム開発研究室に参加

聞き手：総務課編集係

本文だけを残すために認識手法を次世代室のメンバーに研究してもらっていました。が、画像だけ取り出せるのであれば、画像で検索ができるなあ、というアイデアが出てきて、今の形になったんです。OCR精度向上の研究は続けていて、いずれ当館資料の高精度な全文検索ができるようになれば、と思っています。

——それはいいじゃないか！

メタデータ周りでは、昨年11月には、書誌情報からNDC分類を推定するサービスを公開しました。書誌情報だけでなく、例えばニュース記事とか、任意のテキストに対して分類を付与することができるので、図書館以外の文脈でも利用されたらおもしろいかなあ、と思っています。

——業務外ですが、執筆や発表、大学の講師もされていますね。職員同士の放課後勉強会も。

放課後勉強会では、技術書を中心に週1での読書会を2年くらいやっています。近年の技術発展は本当に速いので、日々勉強していないと、とても追いつけません。

研究は、いろいろやりたいことはあるのですが、なかなか時間が取れません。今は、公共図書館のホームページを収集して、そのサービス内容などをテキスト分析しようと試みます。

——面白そうですね。対象はサービスについてでしょうか？

例えばお話し会がどれくらいの頻度で行われているのかとかですね。公共図書館はどんなサービスをやっているのか、取組みがどれくらい普遍的なのか、どういう条件でそれが持続可能だったりするのか、といったことを調べたいと思っています。

◆ ◆

——いつからプログラミングなどに興味を持ったのですか？

パソコン自体は小さいころから触ってましたが、プログラミングを本格的に始めたのは、大学の3年生。大学院でお世話になる先生のゼミに参加して、構造化された、専門用語辞書のエディタを作り始めたのが最初でした。プログラミングは勉強す

るものではなくて、ものを作るための道具なので、何であれ作りたいものが無いと、なかなか身につかないところはありますね。

——JUNJUN.

例えば、ゲームを作ってみたいとか？ 料理教室に行つて複雑なケーキの作り方を習つても、家で普段作らなければ忘れてしまいますよね。そういうのと同じだと思います。

——お菓子作りが趣味だそうですね。プログラミングと共通する点はあるですか？

うーん……、あまりプログラミングとは関係ないですが、強いて言えば理論と段取りがあるところが理系的という意味で似ているでしょうか。お菓子作りは、手早くやらないと泡が消えてしまう工程なんかがあるので、手順を頭の中で展開できる必要があって、これはプログラムの流れを考えるのと似ている……、気もします。

——お母さまの影響で、本好きなお子さんだったとか。母が出版関係だったので、子供のころから本は読んでいましたね。あと、ずっと図書委員でした。

——お話を伺っていると、IT企業で働く適性がありそうですが、なぜNDLを選んだのですか？

技術だけでなく、情報に携わる仕事でしたかったからです。情報というのは、システムということではなくて、本やデジタルデータの中にある知識という意味での情報です。意外に、情報そのものを扱っているIT企業って少ないと思うのです。出版社や新聞社は情報そのものを扱っているかもしれないですが、IT企業ではない。一方、日本のIT企業は請負でお客さんの欲しいものを作る業態が主で、知識を扱っているという感じはあまりないところが多いです。



(上) ジャパンサーチ <https://jpsearch.go.jp/> トップページ

(下) 次世代ライブラリー <https://lab.ndl.go.jp/dl/> 「絵で探す」の検索結果

——NDLを知ったのは、NDLの典拠データを研究で使ったのがきっかけのことですが、具体的にはどんな研究ですか？

人名典拠データを専門家が共同編集するためのプラットフォームの開発、という内容です⁴。私はツールを開発する担当で、共同研究者の先生が、典拠を使ったデータ作成をしていました。具体的には、明治期の写真家と写真に写っている人々の関連付けをしたりとか。

私の大学院での専攻は認知科学で、これはAI研究に端を発する分野なのです。それで、AI研究の歴史に従って機械が推論するルールベースの手法と、大量のデータからパターンを抽出する統計ベースの手法が交互に盛んになってきたという経緯があり、今はディープラーニングというところで統計全盛の時代ですが、一昔前、Web2.0とか言われていた時代には、Web上で人手の作業によって知識が構造化されるみたいな話題もあって、私が行っていたのはそういう知識やルールを作るための支援システムだったとお考えいただけだと思います。

当時のテーマは「素人ではなくて専門家が集団で編集した構造化データ」だったので、私にとっては、図書館というのは今この時代に人手で、プロフェッショナルが書誌や典拠といった知識の構造化をやっているという、正に自分の研究テーマのようなことをやっている組織に見えたんですよ。

実際、NDLにはメタデータ4000万件、典拠データ128万件、画像1.8億枚という膨大なデジタルデータの蓄積があります。これは、今の機械学習の時代には大きな強みだと思います。

——膨大なデータを効果的に使うにはどうしたらいいでしょうか。

やはり、どこまでを自動化して、どこから人手でやるかがポイントです。今の時代、全部人手でやるのはナシですが、全部機械任せというのも問題です。

AIが発達した世界での情報探索は、例えば、画像を撮ったらその内容を機械的に認識して、どこから引っ張ってきた文章を使って自動生成した説明を提示、といった形になっていくような気がします。さら

には、アシスタントAIに音声でふんわりしたオーダーを与えると、そいつがいろいろなものを機械学習で収集してくれるけれど、収集してくれるものも機械が生成したものであったり、とか。

そういった機械任せの仕組みだと、フェイクも混ざるし、広告ベースのビジネスの世界でもあるので、話題になっていくことの情報しか得られない、ということがあると思います。そして、本当に良いものが評価されるのではなく、バズるものが評価されてしまう。隠れた良いものを評価するのは、機械学習では相対的に難しいんです。

——結局、企業は営利が目的ですね。

テクノロジーが発達すれば、様々な問題は解決されるというシリコンバレー的楽観主義もありますが、テクノロジーを悪用しようという人たちの数も限りなく多いに思います。虚偽が我々を不自由にします。虚偽が、不自由な方が生きやすいかもしれないですね。

——どうしても楽なほうに流れてし

まいますね。

人が欲しいのは答えで、問が難しいかどうかは問題じゃない。だから、簡単に答えを出してくれる人のところに行ってしまう。AI側は「これは機械的に出した答えなので責任は持ちません」とサラッと書いておけばいい(笑)。

デマやフェイクへの対策はイタチごっこなところがあります。いくら最先端の技術を使っても、対抗する技術がすぐに出てくる。そういう世界では、専門家が正しい情報をわかりやすく解説するのと、その情報をわかりやすく発信する機能が重要になってくるはず。図書館がそこにもっと貢献できればいいなと思います。そのためには、図書館が技術をいかに必要があるとも思いますが。



——そのほかに、NDLはもっとこうあるべき、こうなったらいいな、ということはありますか？

もっと広く知られて使われるようになることよいなと思っています。先ほどお話ししたWebアンケートの結果

1 アンケートの結果 https://current.ndl.go.jp/FY2019_research

2 ジャパンサーチが最終的にどのようなシステムとなったかは、「ジャパンサーチのシステム・アーキテクチャ」<http://www.arg.ne.jp/node/9738>

3 <https://lab.ndl.go.jp/ndc/>

4 「著者名典拠情報を拡充するための共同編集プラットフォーム」<https://ci.nii.ac.jp/naid/10026468500>

5 志望者向けの職員メッセージ。

https://www.ndl.go.jp/jp/employ/message/h27/1211487_846.html

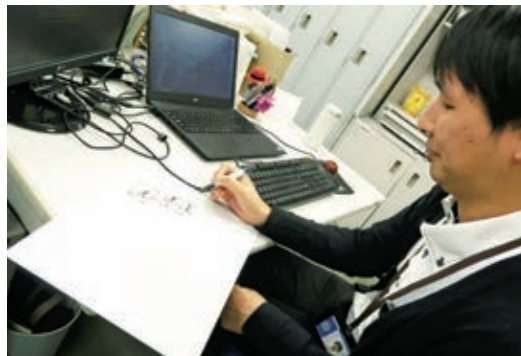
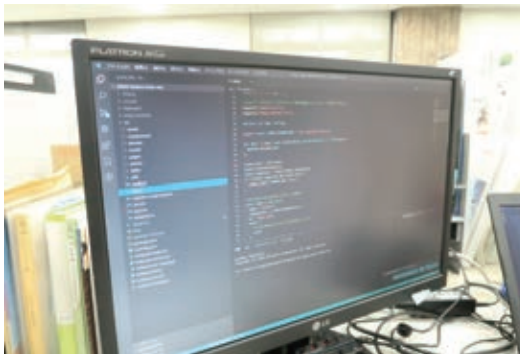
でも、若い人ほど「図書館」への好感度は低い傾向にあるようです。本というメディアの立ち位置も変わっていき中で、公共的な情報インフラとしての図書館は、存在感のある成果を出せないという厳しいのかなと思います。もちろん、情報インフラは民間に任せる、という考え方もあるかもしれませんが、本当にそれでよいのか、公共としては何をしたいべきなのかは、ポスト真実の時代にはより多くの人が考えるべきことなのだろうと思います。

——当館採用ページの「先輩からのメッセージ」で国立国会図書館法の前文にある「真理が我らを自由にする」を強調されていますね。

真理も自由もアイデアの世界にしか無からうという向きもあるうかと思いますが、そのアイデアを考えて仕事ができるというのはNDLで働く大きなモチベーションではないかと。目の最適化にとらわれることなく、長期的に世のため人のためになる仕事ができればよいなと思っています。これは先輩の受け売りですが。

——気恥ずかしい言葉かもしれませんが、NDL職員はこの言葉を大事にしています。

よく考えると、「真理」であって、「情報」でも「資料」でもないんですよね。「真理」というからには、資料や情報に対して、正しさの価値判断が入ったものであるはずですが、「資料が我らを自由にする」だったら、ただ機械的に資料を提供するだけでよいのかもしれませんが、そうでない以上、「真理」とは何なのかという点に向き合うことが大事なのだと思います。



携帯ホワイトボードを愛用



自作スイーツ「オペラ」

欧州の国立図書館と複写サービス

伊藤 暁子
(利用者サービス部複写課)

複写サービスは、図書館に来館した多くの方が利用するサービスです。当館でも複写サービスを提供しており、手続きの簡便化や提供にかかる時間の短縮など、サービスの向上に努めてきました。

筆者は、2018年11月にスウェーデン、イタリア、イギリス、デンマークの国立図書館を訪問し、各館で行われている複写サービスについて現地調査を行いました。いずれの図書館でも、当館と同様に、各国の著作権法等の法令や各館の運用規則等に基づいて、複写サービスが行われています。ここでは、それぞれの図書館の様子をお伝えするとともに、各館で行われている複写サービスの一端をご紹介します。

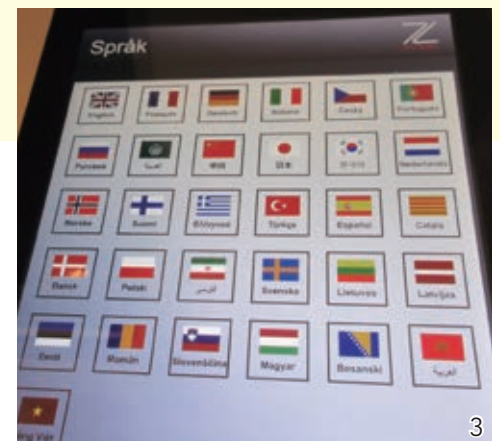


Kungliga biblioteket

スウェーデン国立図書館は、ストックホルム中心部にあるフムレグーデンという公園の中にあります。19世紀に建てられた旧館とガラス張りの新館から成り、法定納本図書館として、スウェーデン国内で出版された資料やスウェーデンに関連する外国資料の収集等に中心的な役割を果たしています。旧館には、地図や写真、楽譜などを所管する特別閲覧室があるほか、新館には音楽映像資料や新聞のマイクロ資料が集約されています。

同館では、著作権法等の規定に基づき、著作権者の許諾なしに複写できるのは、非商用利用（日本の著作権法でいう図書館等における複製の「調査研究の用」に相当。以下同じ）の場合は、一著作物の25%までとなっています。利用者はこの規定を順守して複写サービスを利用することが求められ、館内の掲示等で案内が行われています。

来館サービスでは、利用者自身が館内に設置されたスキャナを用いてスキャンデータを作成し、各自のUSBに保存することができます。筆者も実際に体験しましたが、日本語も含めて30か国語以上の言語に対応した操作画面があり、スキャナの操作に慣れていない筆者でも簡単に使用することができました。また、利用者が持ち込んだカメラやスマートフォンなどによる撮影も可能です。一方、遠隔サービスでは、同館ホームページ上のフォームやメール、館内でのレファレンスなどを通じて複写を申し込み、同館の職員によって複写作業が行われます。複写製品は、紙の他に、申込時の指定により、利用者に電子ファイルをメールで送付することが可能です。



1 閲覧室
2 特別閲覧室のカメラ撮影場所
3 多言語対応したスキャナの操作画面

国立国会図書館の複写サービス

当館では、著作権法や当館の資料利用規則等の規定に基づいて、利用者の調査研究の用に供するため、公表された著作物の一部（一著作物の半分以上を超えない範囲。発行後一定の期間を経過した定期刊行物に掲載された個々の著作物はその全部）を複写サービスで提供しています。利用者はこの範囲であれば著作権者の許諾を必要としませんが、必ず当館の職員が条件に合致しているか確認を行っています。

複写サービスには、来館サービスと遠隔サービスの二つがあります。来館サービスでは、利用者が当館に来館して複写を申し込み、その日のうちに複写製品を受け取るか、後日郵送で受け取るものがあります。一方、遠隔サービスは、利用者は来館することなしにインターネット等を通じて複写を申し込むもので、郵送により複写製品を受け取ります。いずれの場合も、作業は一部を除いてすべて当館（複写作業は外部委託）が行います。また、複写製品は、基本的に紙又はマイクロフィルムの形態で提供します。

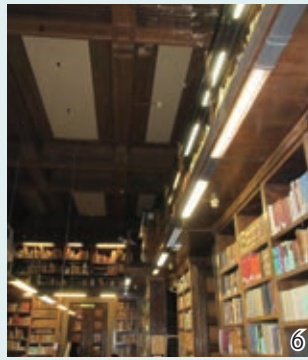


Biblioteca Nazionale Centrale di Firenze

4



5



6



7



8

<フィレンツェ国立中央図書館>

- 4 外観
- 5 エントランスホール
- 6 閲覧室

<ローマ国立中央図書館>

- 7 外観
- 8 スキャナ

Biblioteca Nazionale Centrale di Roma

イタリアでは、ローマ国立中央図書館とフィレンツェ国立中央図書館を訪問しました。イタリアには文化財・文化活動・観光省の下に46の国立図書館があります。その中でも今回訪問した2館は、法定納本図書館として、イタリア国内で出版された資料の収集、保存及び提供に中心的な役割を果たしています。

ローマ国立中央図書館は、首都ローマの中央駅であるテルミニ駅から徒歩10分ほどの中心部に位置しています。1975年に建てられた比較的现代な建物の中にあり、18歳以上であれば利用者登録を行い、提供されるサービスを利用することができます。館内には主題別の閲覧室があり、それぞれに関する参考図書が開架されています。所蔵資料の多くは書庫の中で管理されており、これらの資料を閲覧するには、館内に設置された端末で資料を検索して請求し、閲覧室で受け取る必要があります。

一方、フィレンツェ国立中央図書館は、フィレンツェ市内のアルノ川沿いに位置する重厚な石造りの建物の中にあります。すぐ隣にはサンタ・クローチェ聖堂があり、館内にいると聖堂の鐘の音が聞こえてきます。こちらは16歳以上であれば利用者登録を行うことができます。こちらも所蔵資料の多くは書庫の中で管理されており、1886年以降に刊行された資料は、館内に設置された端末から資料を検索して請求し閲覧します。一方、1886年

より前に刊行された資料は、主題別の閲覧室で管理されており、各閲覧室で別途手続きを行って閲覧します。

イタリアでは、図書館で著作権者の許諾なしに複製できるのは、非商用利用の場合は、一著作物の15%までと著作権法で定められています。今回訪問した2館では、所蔵資料を複製するためには、この規定を順守する旨を申請書に記入して閲覧室のカウンターに提出しなければなりません。

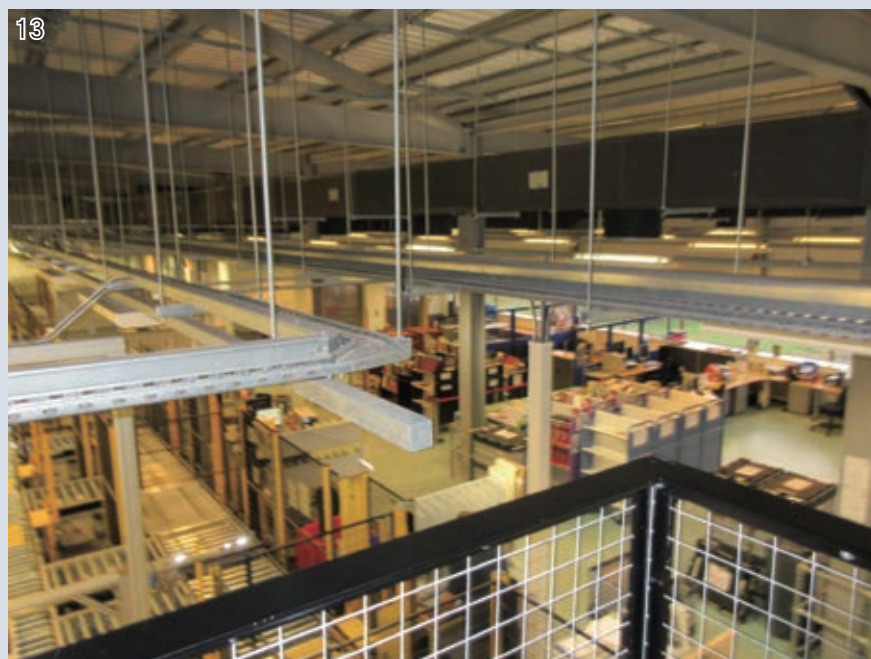
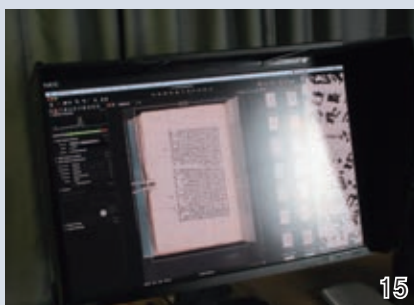
ローマ国立中央図書館では、2017年まで行われていた外部委託による複製作業の廃止により、現在は、利用者自身が閲覧室に設置されたスキャナを用いてスキャンデータを作成します。このデータは、同館ホームページ上の利用者マイページに保存され、各自のパソコンにダウンロードすることができます。一方、フィレンツェ国立中央図書館では、利用者は、メールや電話、館内でのレファレンスなどを通じて複製を申し込み、同館の職員や委託業者が複製作業を行います。複製製品は、紙の他に、申込時の指定により、利用者に電子ファイルのリンクをメールで送付して提供することができます。また、博物館等で認められていたカメラ撮影を図書館でも可能にする法令が2017年に制定されたことにより、今回訪問した2館では、利用者が持ち込んだカメラなどでの撮影が可能となっています。

英国図書館はセントパンクラス館とポストンスパ館から成ります。セントパンクラス館はユーロスターが発着するセントパンクラス駅など主要なターミナル駅に近接するロンドン中心部にあります。館内には主題別の閲覧室のほか、展示ギャラリーやカフェテリア、ショップ等もあります。一方、ポストンスパ館はヨークシャーの駅から車で30分ほどの田園地帯にあります。館内は、閲覧・学習用の閲覧室が一つ設置されている以外はほとんどが書庫です。所蔵資料のうち、利用頻度の高い納本資料はセントパンクラス館で、利用頻度の低い納本資料や購入資料はポストンスパ館で管理されています。それぞれの資料は、ポストンスパ館を中心に行われる資料提供サービス（BLDDS）により、相互に輸送して48時間以内に閲覧に供することが可能です。

同館では、著作権法等の規定に基づき、非商用利用の場合は、図書は一著作物の5%まで、雑誌は掲載された一論文のみ、著作権者の許諾なしに複写することができます。利用者はこの規定を順守して複写サービスを利用することが求められ、館内の掲示等で案内が行われています。

来館サービスでは、利用者自身が閲覧室に設置されたスキャナを用いてスキャンデータを作成し、作成したデータを各自のUSBに保存するか、各自のアドレスにメールで送信します。また、利用者が持ち込んだカメラなどでの撮影も可能です。遠隔サービスでも、紙などの他に、申し込んだ利用者だけが読めるように暗号化するDRM-Liteというシステムを用いることを条件に、申込時の指定により、利用者に電子ファイルのリンクをメールで送付することができます。

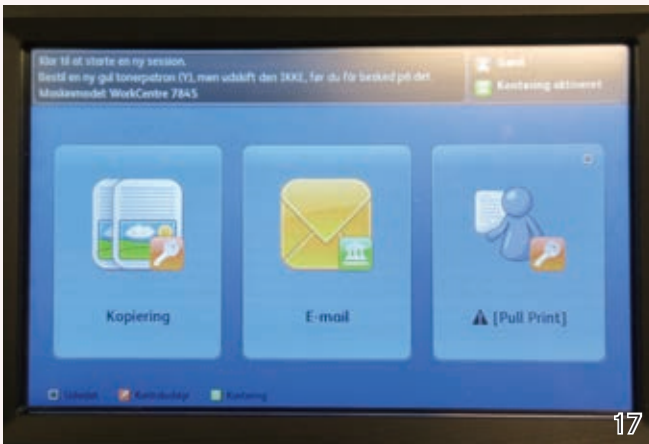
British Library



See also...

「世界図書館紀行 イギリス」
(654 (2015年10月)号)

- <ポストンスパ館>
- 9 ざらりと並ぶスキャナ
- 10 閲覧室の掲示
- 11 遠隔複写申込書
- 12 書庫棟内部
- 13 BLDDSの発送センター
- <セントパンクラス館>
- 14 資料撮影の様子
- 15 撮影した画像



- 16 新館アトリウムから見た閲覧室
- 17 コピー機の画面
- 18 高度なスキャナ

See also...

「世界図書館紀行 デンマーク」
(675/676(2017年7/8月号))



Det Kongelige Bibliotek

デンマーク王立図書館は、国会議事堂や最高裁判所などがあるデンマーク中心部のスロツホルメンにあります。旧館と新館から成りますが、特に黒い花崗岩を外壁に用いた新館はブラックダイヤモンドと呼ばれ、観光名所の一つともなっています。内部には、運河に面したガラス張りのアトリウムがあり、そこに佇んでいると一瞬、自分が図書館にいることを忘れてしまいます。

同館は、デンマークの国立図書館であるとともに、コペンハーゲン大学、ロスキレ大学、オーフス大学の大学図書館でもあります。そのため、法定納本図書館としてデンマーク国内で刊行された資料の収集などに中心的な役割を果たすとともに、所属する大学の研究や教育を支援するという大学図書館としての役割も果たしています。館内には主題別の閲覧室の他に、大学に所属する学生専用の閲覧室やオープンスペースも設置されています。館内の至るところで熱心に勉強する学生の姿が見受けられ、他の国立図書館とは異なった雰囲気を持っていました。

同館では、非商用利用の場合は、パブリックドメインとなった資料のみを対象として、利用者自身が館内に設置されたスキャナで作成したデータをメールで各自のアドレスに送信したり、遠隔サービスにおいて電子ファイルをメールで受け取ることができます。また、利用者が持ち込んだカメラなどによる撮影も、パブリックドメインとなった資料に限り可能となっています。

欧州の秋の深まりを感じながら、各国の国立図書館を駆け足で訪問しましたが、一口に国立図書館と言っても、外観から、提供されるサービスに至るまで、各館によりさまざまの特徴がありました。

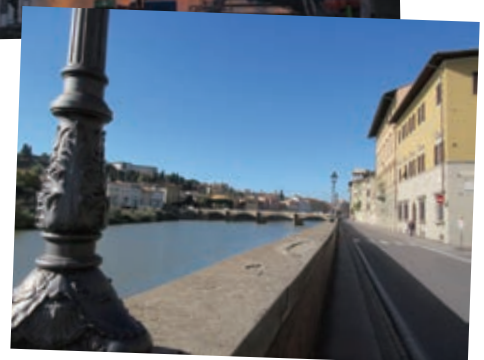
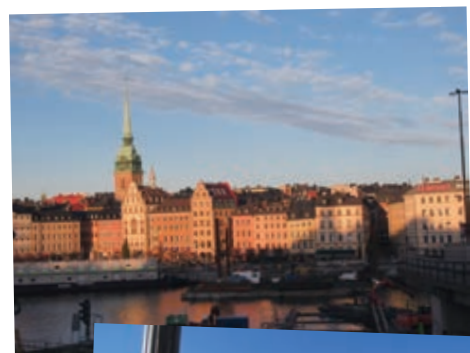
今回ご紹介したのはそれらのほんの一端に過ぎませんが、複写サービスについては、いずれの図書館でも、各国の著作権法や各館の運用規則等に基づいて、資料の保存を図りながら、その制約の中で利用者にできる限り有用なサービスを提供するという視点で行われていました。

来館サービスでは、各館とも館内にスキャナが設置されており、利用

者自身が慣れた手つきでスキャンデータを作成している様子に非常に驚きました。

一方、遠隔サービスでは、当館と同様に、職員が複写する箇所にしおりを挟んで、複写作業を行い……というように地道に作業を行っていた。当番制にして作業を行うなど、当館と共通する部分も多く、職員の方のお話を伺いながら同じサービスを担当する者として共感する場面の連続でした。

当館でも来館サービス、遠隔サービスともに毎日多くの複写サービスを提供していますが、今後より一層励んでいきたいと思っています。



(上) ストックホルムの街並み
(下) フィレンツェのアルノ川

「雑誌」と聞いて、どのようなものを想像するでしょうか。漫画雑誌やファッション誌といった、普段目にする機会が多い雑誌を思い浮かべるかもしれません。しかし、国立国会図書館が所蔵する雑誌は、内容面でも形態面でも実に多岐にわたっています。たとえば、形態に着目すると、年鑑のようなしつかりした外装を持つものもあれば、週刊誌のような背をホチキス止めしただけのものもあります。中には、綴じすら存在しない、中央を折っただけの簡易な作りの資料も存在します。また、雑誌全般の特徴として、長期保存を前提としていないものが多く、図書と比べて紙質が悪いという点が挙げられます。

そのため、雑誌によつては、そのまま利用・保存している、破損が生じたり、資料の一部が本体と離れ離れになったりする危険があります。そこで、資料を複数束ねて一定の厚みの束にして綴じ、しっかりとした外装を付ける「製本」を行うことで、資料を長く保存・利用できるようにしています。また、必要に応じて、かつて一度綴じた古い資料を綴じ直したり、破れを補修したりしています。

製本の実作業そのものは外部に委託しています

が、資料の状態を確認して、製本方法を決定するのは、当館職員の役割です。実務では、一冊一冊を目の前に、頭を抱えることが少なくありません。たとえば、本誌に対して一回り小さな冊子体の付録が付いているものがあります。このような資料は、付録と本誌を一緒に製本すると、本誌のページが曲がったり、破れたりしてしまいますので、本誌と付録をあえて別々に製本することがあります。

また、戦中から戦後にかけての資料の中には、劣化して変色し、触れるだけで破れるような資料も多くあります。このような場合には、再度綴じ穴を開けて製本し直すことは諦め、「保存容器」と呼ばれる専用の中性紙の箱に入れます。この箱に入れることで、ページの散逸をふせぎ、資料を光やホコリから守ることができるのです。

「100年後もよみたい」。これは、当館の納本制度の標語です。この言葉のとおり、資料を後世に引き継ぐため、職員は、今日も一冊一冊と向き合いながら製本業務に携わっています。そうしていると、「100年後もよんでほしい」、そんな資料の声が聞こえてくるような気がします。

(図書館資料整備課 雑誌保管係 もなか)



綴じ直す予定の、綴じ糸が切れたり外装がひどく傷んだりした資料



100年後もよんでほしい

本屋に

ない

本

幼稚園のバザーで3歳の私が見つけた河童のぬいぐるみをもがいたく気に入ってからというもの、わが家では河童のぬいぐるみをつつましく蒐集していた。

しかし、ふわふわの河童に育まれながら、一方で、気味の悪い河童もいると幼い私は知っていた。芥川龍之介が描いたひよろひよろの河童もそうだが、昔話の「尻子玉」を抜きに来る河童の話などは胃がぞっとする感じがある。これらの、河童に対する親しみと恐怖の相反する感情はどこから来ているのだろうか。

「君は河童を見たか！」という問いかけによって河童という存在のあいまいさに気づかせてくれる本書は、長野

県立歴史館で平成30（2018）年に開催された、人・水辺・河童をめぐる夏季企画展の図録である。

本書における人と河童の歴史は、古代の水辺を舞台とした異界との交流から語り起こされる。河童ははじめから現在のような姿を持っていたわけではなく、水中世界から遣わされる精霊や水の神への供物としての瓜などのモチーフが、時代が下り、水への畏れが薄らぐにつれて、水辺の妖怪へと集約されてゆき、江戸時代に至って河童という名前と姿を与えられることになったのだという。

本書には河童に関するさまざまな資料が掲載されているが、とりわけ興味深いのは、河童をめぐる逸話に登場



君は河童を見たか!
水辺の出会い
平成30年度夏季企画展

長野県立歴史館 編集・発行
2018.6 95p 30cm
<請求記号 GD38-L109>

し、今日まで伝わる実物の品々だ。焦茶色に干からびて木の箱に納められている「河童の手」は、悪さをした河童が改心の証に置いてゆき、安産のお守りとして用いられてきたもの。河童の風貌を持つやかんのような謎の物体「銅鑊子^{どうがんとす}」（本書の表紙にも登場）は、真田信之の家臣の家で夜ごと動き回って酒をすすったという。

また、長野県内の河童伝承が水系ごとに紹介されており、かつての人と河童の距離の近さを感じさせる。中には「河童捕り」なる人物や、女性に化けて家の手伝いに来る河童など、妙に生々しい口調で語られるものもあるが、伝承の半分ほどは人と河童の交流が突然途切れるところで終わっている。

そうした伝承を読んでいると、河童との断絶は、後の時代に来る河川の開発や豊かな生態系の喪失に繋がっていたように思われてくる。実際に、河童のモデルの一つともいわれるニホンカワウソは、近代化の途上で絶滅してしまっているのだ。

河童が人々の前から姿を消してしまってもなお、私たちは河童を忘れずにいる。それは、河童を通して自然や異界への好奇心と畏敬を手放さずにいようとする心の表れかもしれない。

「河童を見たか！」という問いは、私たちが河童を見ようとするとき、私たちがまた河童に見つめられているということにも気づかせてくれる。

（鈴木加成太^{かあなただ}）

国立国会図書館は、法律によって定められた納本制度により、日本国内の出版物を広く収集しています。このコーナーでは、主として取次店を通さない国内出版物を取り上げて、ご紹介いたします。

関西館資料展示(第27回) 「図書館で駆け抜ける! クルマの世界」

一歩外に出れば、多くの車が道を行き交っています。ヨーロッパで発明され、アメリカ力で大衆化された自動車は、日本でも20世紀に移動手段や産業として発展しました。とりわけ、高度経済成長期に急速に普及し、居住地やレジャーなど、私たちのライフスタイルに多大な影響を与えました。しかしその一方で、交通事故や環境問題といった課題も浮き彫りになってきました。そして現在、自動車は次世代へ向けた最新技術を備えながら、社会を再度、大きく変えようとしています。

本展示では、歴史、産業、生活、デザイン、次世代技術といった観点から、自動車に関する資料約80点をご紹介します。自動車の駆け抜けてきた道のりと行く末に、思いをさせてみませんか?

○開催期間 2月20日(木)～3月17日(火)

※日曜・祝日を除く

○開催時間 9時30分～18時

○会場 関西館閲覧室(地下1階)

○問合せ先 関西館資料案内

電話 0774(98)1341

また、関連講演会を次のとおり開催します。奮ってご参加ください。

○演題 自動運転技術の社会的インパクト
○講師 三好博昭氏(同志社大学政策学部教授、技術・企業・国際競争力研究センター長)



○日時 2月29日(土) 14時～16時

※講演後、当館職員による展示紹介を約15分を行います。

○会場 関西館第1研修室(1階)

○定員 70名(事前申込制・先着順)

○申込方法 ホームページ「イベント・展示会」の申込フォームからお申し込みください。

または、左記の情報を記載の上、FAXでお申し込みください。

- ①件名「資料展示講演会申込み」、②氏名(よみがな)、③電話番号、④FAX番号
- 申込先(FAX) 0774(94)9108

国立国会図書館関西館

図書館で駆け抜ける! 第27回資料展示

期間 2020.2.20～3.17
9時半から18時まで
会場:地下1階閲覧室

入場無料 年齢制限なし 日祝休館



落合浪雄著『タキシ物語 自動車小説』平安堂 大正2
<請求記号 特106-548>



日本ゼネラル・モーターズ株式会社
販売店経営課 編『自動車発明史(販売員新常識講座)』日本ゼネラル・モーターズ 昭和14
<請求記号 特233-746>

NDL Topics

講演会「デジタル時代の国立図書館の挑戦 —オランダ国立図書館の戦略を事例として— 開催のお知らせ

図書館は、デジタル革新の波をどう捉え、利用者に還元していくべきでしょうか。国立国会図書館では、欧州のデジタル先進国であるオランダからリリー・クニベラーオランダ国立図書館長と同館の戦略アドバイザーであるエルスベート・クワント氏をお招きして、社会に対する国立図書館の在り方、将来像実現のための戦略、テクノロジーやネットワークの活用について、講演とパネルディスカッションを開催します。

日英同時通訳付き、入場料無料です。ぜひご参加ください。

○日時 3月17日(火) 14時~17時(開場 13時30分)

○会場 東京本館新館講堂

○登壇者

リリー・クニベラー氏(オランダ国立図書館長)

エルスベート・クワント氏(同館戦略アドバイザー)

竹内比呂也氏(千葉大学副学長兼附属図書館長/アカデミック・リンク・センター長、同大学人文科学研究教授)

佐藤毅彦(国立国会図書館電子情報部長)

○申込方法 ホームページ「イベント・展示会情報」から3月10日(火) 17時までにお申し込みください。定員(200名)に達した時点で受付を終了します。

○問合せ先

総務部支部図書館・協力課協力係

電子メール lecture@ndl.go.jp

蘆原英了コレクションの音楽・映像資料室への 移転作業に伴う利用の一時休止について

東京本館人文総合情報室で所蔵する蘆原英了コレクション(請求記号がVAで始まるもの。約32,000点を、音楽・映像資料室に移転するため、利用を一時休止します。

当該コレクションは、バレエ、シャンソン、演劇サーカスなどに関する多様な資料で構成され、図書のほか、レコード、楽譜、公演プログラム等を含みます。移転により、これらの資料を、録音資料の再生装置や音楽に関する参考図書等の整った環境でご利用いただくことが可能になります。

利用者の皆様にはご不便をおかけいたしますが、ご理解とご協力をお願いいたします。

○利用休止期間

令和2年3月1日(日)~3月31日(火)(予定)

○移転作業終了後の利用

4月1日(水)から、東京本館音楽・映像資料室でご利用いただけます。なお、一部の資料は、閲覧許可の申請が必要です。

○問合せ先

電話 03(3581)2331(代表)

(令和2年3月末日まで)

利用者サービス部人文課

令和2年4月以降

利用者サービス部音楽映像資料課

令和元年度児童サービス研究交流会

国際子ども図書館では、児童サービス関係者が集まり、特定のテーマについて最新の動向を学び、相互交流等を行う場として、児童サービス研究交流会を開催します。今年度のテーマは「多文化社会における児童サービスの現在」です。

○日時 3月9日(月) 10時30分~16時10分

※終了後、希望者に館内見学を実施します。

○会場 国際子ども図書館アーチ棟1階研修室1

○定員 80名(事前申込制・先着順)

○申込方法 ホームページからお申込みください。

○参加費 無料。ただし、旅費等は受講者側の負担となります。

○問合せ先 国際子ども図書館企画協力課

電話 03(3872)2053(代表)

新刊案内

外国の立法 立法情報・翻訳・解説 第282号

アメリカの2018年証拠に基づく政策形成基盤法
アメリカの量子情報科学の進展を目的とする立法—国家量子
子—ニシアチフ法—

EUの海洋ごみ対策及び循環経済への転換に向けた取組—
特定のプラスチック製品による環境への影響を低減する
指令—
台湾の文化基本法



A4 90頁 季刊 1,800円(税別)
発売 日本図書館協会
ISBN 978-4-87582-852-5

レファレンス 827号

家計資産の現状とその格差―近年の動向と主要国との比較―
資産移転課税をめぐる内外の方向性
地方税の現状及び地方公共団体における財源確保の取組
ウィルス性肝炎への対策



A4 94頁 月刊 1,000円 (税別)
発売 日本図書館協会

カレントアウェアネス 342号

ヘルシンキ中央図書館「Oodi」の機能・理念とその成果
SDGsと図書館 ―国内の取組から―
新元号と文字コードの国際標準を巡って
△動向レビュー▽



A4 24頁 季刊 400円 (税別)
発売 日本図書館協会

フェイクニュースと図書館の関わり…米国における動向
ワールドデジタルライブラリーの動向

入手のお問い合わせ

日本図書館協会

〒104・0033

東京都中央区新川1・11・14

電話 03(3523)0812

新副館長就任

坂田和光国立国会図書館副館長が令和元年12月24日
付で退任し、同日付で田中久徳が副館長に任命さ
れました。



田中久徳副館長

おもな人事

令和元年12月24日付け

△辞職▽

副館長

坂田 和光

△異動▽

※()内は前職
副館長、総務部長事務取扱 (総務部長)

田中 久徳

令和元年度国立国会図書館長と大学図書館長との懇談会

令和元年11月27日、東京本館において標記の懇談会
が開催されました。これは、国立国会図書館が、国公
私立大学図書館協力委員会委員館の図書館長および関
係機関の代表者を招いて毎年行っているものです。

今年、「図書館による地域連携・社会貢献活動につ
いて」をテーマとし、国立国会図書館から、国会と国
民をつなぐ役割を果たす国会関連システム、調査及
び立法者査局の刊行物の一般公開、国立国会図書館東
日本大震災アーカイブ、次世代システム開発研究室で
の取組、関西館の周辺地域の各種事業との連携、図書
館及び図書館情報学の情報発信の取組等について報告
しました。あわせて、マラケシュ条約発効に伴う視覚
障害者等のための国際的なデータ交換サービスについ
て紹介しました。呑海沙織筑波大学附属図書館副館長
からは、大学や大学図書館における社会貢献の位置付
けや求められる役割、社会貢献事業の例、筑波大学附
属図書館とつくば市立図書館との連携の具体的事例に
ついて報告がなされました。

その後、国立国会図書館東日本大震災アーカイブの
データ収集方法及びアーカイブの維持、大学図書館と
公共図書館との資料の相互利用及び今後の展開、視覚
障害者等への情報提供における大学内他部署との連
携・国全体の横断的取組や視覚障害者等用のテキストト
データ作成の効率化のための取組、地域住民のリカレ
ント教育の場としての大学図書館の在り方や学生の利
用とのすみ分け等について、質疑、意見交換が行われ
ました。

2

NATIONAL
DIET
LIBRARY
MONTHLY
BULLETIN
2020.2

NO.706
FEBRUARY
2020

CONTENTS

- 01 <Book of the month-from NDL collections>
The American diary of a Japanese girl: A story from across the sea
- 06 World Library and Information Congress:
85th IFLA General Conference and Assembly
- 12 The Personal Libraries of Well-Known People (2)
Segoe igo bunko
- 16 Working at the NDL, Episode 2
- 20 Copy services at national libraries in Europe
- 24 <Tidbits of information on NDL>
Will You Still Read Me in a Hundred Years?
- 25 <Books not commercially available>
Kimi wa kappa o mita ka!
- 26 <NDL Topics>

国立国会図書館月報

令和2年2月号 (No.706)

令和2年2月1日発行

発行所 国立国会図書館
編集者 三浦良文
責任者

印刷所 株式会社丸井工文社

〒100-8924 東京都千代田区永田町1-10-1
電話 03 (3581) 2331 (代表)
FAX 03 (3597) 5617
E-mail geppo@ndl.go.jp
<https://www.ndl.go.jp/>

本誌に掲載した論文等のうち意見にわたる部分は、それぞれ筆者の個人的見解であることをお断りいたします。
本誌に掲載された記事を全文または長文にわたり抜粋して転載される場合には、事前に当館総務部総務課にご連絡ください。
本誌517号以降、PDF版を当館ホームページ (<https://www.ndl.go.jp/>) >刊行物>国立国会図書館月報でご覧いただけます。



NATIONAL
D I E T
LIBRARY
MONTHLY
BULLETIN
2 0 2 0 . 2

 国立国会図書館
National Diet Library, Japan

図
書

国
人

国
士